

『伊勢物語』の女君たち 1

Ladies described in “Isemonogatari” Part 1

坂野晴和
Harukazu Banno

目次

1. はじめに
2. 「こともなき女ども」第58段
3. 高安の郡の女と「筒井つ」の女君 第23段
4. 花橋の女君ほか 第60段 第62段 第24段
5. 「ゆく螢の女」と「けしうはあらぬ女」第45段 第40段
6. 「白玉か何ぞ」と問ひし女君 第6段 第4段 第3段
7. 伊勢の斎宮 第69段

1. はじめに

『伊勢物語』は、我が国最古の歌物語作品であり、伝奇物語の祖『竹取物語』とともに、我が国固有の文芸様式である物語文字をつくり上げる、完成させる、その先行作品として大きな意義をもつ作品である。『竹取物語』が今日定説となっている、口承の民間に流布していた種々の説語・譚¹をもとに、現在見ることのできる一つのまとまりをもった作品につくり上げられていったのとは違い、既存の歌とその詞書を、詞書をふくらませることによって歌を中心とした独立の一小話としてそれぞれを完成させ、それらを一つの意図のもとに1冊にまとめ上げ、それを更に別の考えをもった人によって加筆・増補されてでき上がったものである。

前者は子ども向けのお伽噺として、現在も絵本や児童読みものに形を変え、多くの愛好者・愛読者をもっているが、後者は平安の完成時の形のまま、「みやび」を主題とした、歌物語として一部の専門家、更にまた多くの古典愛好家に尊重され、読み継がれている。

これは更に、内容から一つは歌学書、歌の作法書として歌を学ぶ人々の手本として尊重され、一つはかつて唐木順三氏が「無用者」ととらえた在原業平の一代記、その事蹟を偲ぶべきものとして定着してもいる。日本人の判官びいきの源流をここに見ることができるのであ

坂野 晴和

る。他にまた一つには、「体貌閑麗」²という美男子業平の愛の遍歴、多くの女性との交情が、男女のあり方、殊に女性のあり方・生き方を知る、学ばべき人生の指南書として広く多くの愛読者をもっているのである。

ここには多くの女性、老若、未婚既婚、貴賤、都鄙と様々な境涯の女性が登場している。その数、およそ百人にも上る多さである。各時代の女性たちはこれを読むことによって、自分自身の生き方の一つの手本として身につけていったのではないだろうか。本稿ではそういった視点で、ここに登場する女性たちをとらえてみることにする。なお、本文はすべて新潮日本古典集成『伊勢物語』による。

2. 「こともなき女ども」第58段

この作品に直接登場する女性の数は、厳密には93人と、この第59段の「こともなき女ども」の数人である。「昔、男」を主人公とする全125段から成る作品としては、やはり女性が多く描かれており、その意味では女性を描いた作品といってもよい。男と女の心理、恋情がそのほとんどである中で、この「こともなき女ども」の段は異質である。「『心づきて色好みなる男』と『宮ばらに、こともなき女ども』の応酬ぶり³を物語る一段である。」と先学が指摘しているように、ここには男女の交情は描かれてはいない。無縁な女たちの教養のなさを歌の贈答の形で揶揄したものとなっている。

むかし、心づきて色ごのみなる男、長岡といふ所に家造りてをりけり。その隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、

これは書き出しの設定部である。「むかし、男ありけり。」の男を具体化し、業平らしい男を主人公とし、その男が母親の住む長岡に家を造ったという。そして隣りの内親王に仕える女性たちを描こうというのである。しかもそれらは特別に容姿に勝れたという女性たちではない。普通の宮仕えの女たちなのである。だが、当時としては上流とはいえないまでも中程度の女たちである筈である。『古今和歌集』にも一応通じた女性たちなのであるからである。それが情ない失態を終始さらずなのである。人の気配をみて、家の造作を見るために、ずかずかと他人の家に入り込んでくる。そして、相手が何の待応もしないので、「荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ」と歌で悪態をつく。男は、「うれたさはかりにも鬼のすだくなりけり」と女たちを鬼の一団と見立てて返歌する。面目を失った女たちは「穂ひろはむ」と帰ろうとするが、それに追い討ちをかけて男は更に「うちわびて落穂ひろふと聞かませば我も田面にゆかましものを」と一首を贈ったというのである。卑しく貧しい自分たちなのだという自覚のある女たちならば、この私もお手助けしようものをと歌ったのである。不作法きわまりない女たちを戒めたのである。一方、男は「心づきて色ごのみなる男」であり、都を離れて旧都の地、長岡に家を造り、田園生活をひっそりと楽しむという

風流を賞でる人であった。この女たちからは、「この男のあるを見て、『いみじのすき者』と憧れられる存在ではあるが、この男には許しがたい女たちなのである。

案内も乞わないで、他人の家にずかずかと、それも大勢で入り込む。そして騒ぐ。そこに見た、先程いた筈の人が顔出しもしないので、それに腹を立てて、悪態をつく。しかも『古今』の歌で悪態をついたのである。それに対して「鬼のすだくなりけり」とやり返されても悪びれもせず、「穂ひろはむ」と言いながら平気で、一言の謝りもなく外へ出ていく。こういった女性は、昔男には論外なのである。

3. 高安の郡の女と「筒井つ」の女君 第23段

「たけくらべ」として名高い第23段には、2人の女性が描かれている。片や幼馴染みで初恋の人であった理想的な女性、その妻としてのあり様、片や、ちょっと見のよい見栄えのする女性ではあるが、軽薄な女の姿が描かれているのである。

大和と河内を隔てる山に生駒山・高安山がある。生駒山系の山々が北から南へと連なっているのである。この2人の女性は高安と高安の郡の女性である。「筒井つ」の歌で初志を貫いた男は、大和の女の家と一緒に生活をしてきたが、親の死によって家計が苦しくなると、「田舎わたらひ」の仕事で大和から高安まで出掛けて行くことになる。親の生業を引き継いだのである。相思相愛の仲ではあったが、時間の経過と経済的な苦しさ、男の興味を仕事先の女性に向けることになった。高安の女は「はじめこそ心にくくもつくりけれ」とあるように、最初は若い娘として当然のことに見繕いを化粧もしてこの男の興味を引いた筈であるが、本性はやがて露見することになる。しばらくすると、「いまはうちとけてつづから飯匙とりて、筥子のうつはものにもりける」状態になったのである。妻の座にすっかり気を許して、「一家眷族の者たちの食器に飯を盛り分けたりして、たまたま訪問して来ている夫など眼中にもなく、糠味噌女房にどっぷり浸ってしまっていた」⁴と竹岡氏が指摘するような状態になったのである。ここで問題になるのは、「手づからいみかひとりでけこのうつはものにもりけるを」（屋代弘賢校訂 参考『伊勢物語』）の校訂部分である。

『古語大辞典』（小学館）の「けこ」の語誌に、『伊勢』のこの部分を例として挙げ、「家口＝一家ノ者也」（色葉字類抄）を上げ、更に「一家眷族の者の意の「けこ（家子）」と見るのが自然で、食器としての「けこ」の存在は疑わしい。」と岡崎正継氏は結論づけている。

「筥子のうつはもの」は「家子の器もの」なのである。更に伝本によれば「心にくもつくりけれいまはうちとけて」の後に「かみをかしらにまきあけておもなかやかなる女の」などと書かれてもいる。高安の女性のなんと自堕落な姿である。一方、初恋の女性は、夫が河内へ出掛けていくと、「いとようけさうじて、うちながめて、風吹けば沖つしら浪たった山よはにや君がひとりこゆらむ」と夫の身を気遣うのである。本人は自分が出掛けていくと、この女性が「いとようけさうじてうちながめて」とその動静に自分と同じく邪まな思いをもつが、詠まれた歌「風吹けば沖つしら浪たった山」に妻の変わらない情愛をみて恥入って、

以後、高安へは行かなくなったというのである。身繕い、化粧、歌で夫を気遣う妻の心根に、胸打たれたのである。これこそあるべき妻としての女性の姿であるといっているのである。並み以下の家庭にあってもこうありたいものだとししたのである。

4. 花橘の女君ほか 第60段 第62段 第24段

第60段・第62段・第24段の3段には、悲しい結末を迎える女性たちが描かれている。妻として不適格な女性たちで、作品中、最も残酷な章段となっている。

第60段では、主人公の男はまだ若く、宮仕えで忙しく働き、妻のことを考えてやる余裕もない生活送っていた。そのため妻には不満が募り、たまたま甘い言葉をかけてくる男の口車に乗って、夫を捨てて田舎へ行ってしまったというのである。その後、男は仕事が認められて、勅使として宇佐八幡宮へ行くことになった。昔の妻が勅使接待の役人の妻となっていると聞き、「をんなあるじにははらけとらせよ。さらずはのまじ」と強要して、昔の妻との再会を果す。そして酒の肴としてあった橘をとって、「五月待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」と歌を詠んだ。女は自分の不明・身勝手さを改めて知り、昔の夫への罪滅ぼしとその幸福を願って、尼になり山に入ってしまったというのである。

第62段は、同趣のものではあるが、一層残酷な話になっている。「心かしこくやあらざりけむ」と女の心根を説明してはいるが、一夫多妻の社会で、長年の間、男（夫）が通って来なくなった女が、やさしく言葉をかけてきた男に引かれて田舎へ行ってしまふ。そしてその男のもとでやってきた元の夫の給仕をさせられるという話である。これだけでも悲しい話であるのに、元の夫は当然のことにこの女を知っていたが、女には即座にはそれと分からなかった。「いにしへのにほひはいづらさくら花こけるからともなりにけるかな」という歌に、やっとそれと気づくが、「こけるから」という残忍なことばに自分の浅慮を恥じ、前夫の心中を思って返事もしていないでいると、男は更に「などいらへもせぬ」と再度女を詰る。女はやっとのことで「涙のこぼるるに、目も見えず、ものもいはれず」と答えたが、男は「これやこの我にあふみをのがれつつ年経れどまさり顔なき」と女を非難し、着ていた着物を脱いで女に与えようとするが、女は恥ずかしさに耐えることができなくて、着物をうち捨ててそのまま行方をくらましてしまったというのである。

男の側から男の論理で自分を裏切った女性を一方向的に攻めたてる。その一方で攻めたてられる救いのない女性を描いたのがこの2話である。

それに対して、第24段は前2話とはいささか趣きを異にする章段である。夫の真意を事後ではあったが理解し、自分を恥じ、初心に立ち帰ったが、時既に遅く、夫の後を追いかけるのが精一杯で、途中、生命絶えてしまふ、死んでしまふという不幸な女の話である。

夫が宮仕えのために単身田舎から都に出、3年間も音信不通の状態におかれた妻が、言い寄る男に3年後の今日、「こよひ逢はむ」と約束した。折悪しくちょうどその当日に夫が帰って来た。女は板挟みになったが、その場の感情からか、または夫への腹いせからか、夫を追

い歸してしまおうとする。「あらたまの年の三年を待ちわびてただこよひこそ新枕すれ」の一首を夫に差し出しただけで、男はそれに対して「梓弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ」と返歌して帰ろうとしたが、女は夫の今も変わらない自分に対する気持・愛情を感じとり、素直に夫に今の気持を歌に「梓弓ひけどひかねどむかしより心は君によりにしものを」と本心を打ち明ける。だが、夫はそれに対して無言で立ち去ってしまう。女はどうしようもなく、ただ男の後を一途に追いかけていった。男の足は速く、よう追いつけなくて、途中、転び倒れてしまった。もうこれまでと意を決した女は、指を傷つけて、その血で「あひ思はでかれぬ人をとどめかねわが身はいまぞ消えはてぬめる」と歌を書いて、そのまま、息絶えてしまったというのである。

夫の返歌の「わがせしがごとうるはしみせよ」、「私がそなたを、すばらしいすてきな女性だと、しんから賞讃し愛したように、そなたも、今度の夫をそのように愛するのだよ」(『全評釈』評)と、男の妻に対する愛の深さを歌に詠んだのである。夫の本心が分かった妻は、生命を賭して夫を追いかけたのである。夫の妻に対する愛のあり様、純愛を描いたのがこの章段であり、一方、自身の死によって償うという女の浅はかさが生んだ悲劇を描いたものなのである。

5. 「ゆく蛩」の女と「けしうはあらぬ女」第45段 第40段

第45段と第40段は共に純愛物語ではあるが、前者は女性の一途な恋心を、後者は男のそれを描いてはいるが、その周囲の対応の違いが際立つ作品である。それは家督・性差による違いである。

第45段は、自分からは声も掛けられない箱入娘が、見染めた男への思いが困じて、そのために「もの病」になって死んでしまうという話である。死の間際にやっと下女に「かくこそ思ひしか」と話ただけで死に絶えてしまう。時代・社会環境の違いとはいえ、現在では到底考えられない「もの病」、恋煩いの悲劇である。とはいえ、明治の女流作家、樋口一葉はその処女作『闇桜』(明治25年3月『武蔵野』掲載)で、お千代という同型の女性を描いている。兄妹同様に育った中村家の一人娘で、隣家の一人息子園田良之助を兄と慕っていたが、たまたま花見で友達にひやかされたのが端緒で良之助との恋に目覚め、以後、実のらぬ恋に苦しみ、死んでしまうのである。『伊勢』の、この「ゆく蛩」をベースに、今風の作品に作り替えたとはいえるものの、明治の20年代にはまだこういった女性、考え方も一般だったと言えるのではないだろうか。

第45段は更に話は続く。親が娘の思いを聞き、男の許へかけつける。その男は身に何の覚えのない女ではあったが、あわてふためいてやって来て、その枕辺で死んだ女性の喪に服するという話で終わっている。相手に伝えることなく純愛に生きた女性よりは誠実な、ただ自分を愛し死んだという女性のために、女の家に来てきてその冥福を祈ると言う心根の優しい男の話となって終わっているのである。

第40段は、親がかりの若い男が家で働く召使の「けしうはあらぬ女」に恋心を抱いた。親は心配したが、どうしようもなく、ついに2人の仲を割こうと女を他に追い出してしまった。男も女も逆うこともできず親のなすままにした。男は血の涙を流したがどうしようもなかった。そこで男は「出でて去なば誰か別れのかたからむありしにまさる今日は悲しも」と歌を詠んで、息絶えてしまったというのである。

親に反対されればされるほど、女への思いが募り、親が女を追い出そうとすると男はどうしようもなくただ血の涙を流して止めようとしたが、それでも親は女を外へ連れ出してしまった。そこで詠んだのが先の歌である。「女が自分で出て行くのなら、誰だってこんなに別れづらくも思うまい。だが無理に別れさせられるのだから、今までの辛さとは比べられぬ程に、今日は悲しいことだ」(本文校注渡辺実)というのであるが、更に詠み終って「絶え入りにけり」、悶絶してしまったというのである。

若い男の一途な愛の姿をそこに見ることができるのである。しかし、話はここで終わらない。息子によかれと思ってやったことが、息子を死へと追いやったのであるから、親は一心に神仏に縋る。願をかけてその蘇生を祈った。「入相ばかりに絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになむ、からうじていきいでたりける。」、息子は日没から翌日の午後8時頃までの24、5時間失神していて、やっと息を吹きかえしたというのである。

わが子を思う親心が一度は死んだと思われた息子を生き返らせたという話である。

同じく一途な恋であっても男と女の違い、その死をめぐるそれぞれの親の対応の違いはどこにあったか。やはりそこには男性中心社会のものの考え方、男性優位の古代社会のあり様を物語るものである。

「むかしの若人は、さるすけるもの思ひをなむしける。今の翁まさしになむや。」と話を結んではいるものの、時代の変化、ものの見方・考え方の推移を慨嘆しているのである。もう既にここに描かれた一途な恋は過去のものなのである。

6. 「白玉か何ぞ」と問ひし女君 第6段 第4段 第3段

第6段は高貴な女性との実らない愛の物語である。冒頭、相手は「女のえ得まじかりけるを」とあり、男にとって最初から手に入りそうもない身分・家柄の女性であり、それでも忘れることができなくて何年も通いつめたのである。それが運よく、女性を「盗みいで」、連れ出すことができたのである。深夜、露深い川岸の道を背負って逃げたのである。女は見たこともない夜景に、露のおりた草叢に光るものを見、「あれは何ですか」と男に尋ねた。やっとのことで女を手に入れた男は正に至福のときで、ただこの場を一刻も早く逃げのびたいという一心で、女に答えてやる余裕もなく、一目散に先を急いだのである。あたりは一段と暗くなり、雨も激しく降ってきて、雷鳴も轟きわたるので、近くにあった倉に女を隠して、男は外で夜の明けるのを待ち、見張りをしていた、その間に女は雷鳴の中で鬼に一口で食われてしまった。夜が明けてきたので、男は倉の中に入ってみると、そこにはもう女の姿はなかつ

たのである。男は「足ずりして泣けどもかひなし。」、地団太を踏んで嘆き悲しんだが、今となってはもうどうしようもなく、「白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消えなましものを」と歌を詠んだのである。女君が夜露が光るのをあれは何ですかと尋ねたとき、あれは露ですよと答えて自分もその場で露のようにはかなく死んでしまえばよかったのにと慚愧の思いにかられたのである。今、一步で、叶えられなかった恋を嘆いたのである。掠奪婚が未遂に終わったのである。ここにも当時の家柄・身分の問題を見ることができる。この話の終わりに次のような付記がある。

これは、二條の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてみ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて後のただにおはしける時とや。

物語作者の付記か、後人の付記かに問題はあつたものの、いずれにしても業平と高子の話であり、評判の高い美人「かたちのいとめでたくおはしければ」の高子の許に業平が通っていたのである。後に清和天皇の后宫になる娘であったので、業平は当然のことに藤原一門からは排除される運命にあつたのである。ここも兄弟たちが見つめて連れ帰ったというのである。

なお、同趣の話に、第3段・第4段がある。第3段は付記によれば、「二條の後の、まだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にておはしませける時のことなり。」とあり、業平と思われる男が恋をして「ひじき藻」に添えて「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも」と歌をおくつたというのである。お互いに愛さえあればどんなに貧しくてもそれだけで十分満足できる、と純粋な愛の讃歌になっているのである。ただここには男の気持ちだけが描かれている。

第4段も同じく男の純愛を描いている。「西の対に住む人」のところへ「本意にはあらでこころざし深かりける人」が通っていたというのである。藤原順子皇太後の住む五條院の西の対にいた高子の許に、通っていたのである。「本意にはあらで」の解釈は現在も多岐にわたり問題のある箇所ではあるが、ここでは文意から一応先学に従って「思うにまかせぬ有様で」⁵と解したい。女君を思う気持ちが困難に直面すればするほど一層激しくなっていたのである。それが、突然、正月の10日頃にいなくなった。尋ねてみると、その行き先は常人の近づけない皇族の許であった。そこで一人悶々の日々を送り、翌年の正月に再び以前女君のいた、自分と逢瀬を重ねたその屋敷にやってきた。そこは今は住む人もなく荒れ果て、昔を偲ぶよすがもない状態であった。そこで去年を思い出して次の歌を詠んだというのである。「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」と。そして夜が明けてくる頃、泣きながらそこを退去したというのである。歌の解釈では「や」を疑問ととるか反

坂野 晴和

語ととるかで説が大きく分かれてはいるが、「わが身ひとつはもとの身にして」と対比して「月」や「春」が問題とされているのであるから、それらは不変の自然と見るのが穏当であろう。そう考えると「や」は、ここでは疑問の係助詞とするのが妥当であろう。反語の「や」とするとあまりにも強すぎて、ここにあるべき余韻・情調を損ねてしまう。「月は昔の月ではないのか。春は昔の春ではないのか。二人で見たあの月、あの春はどこへ行ってしまったのか。」下の句は当然のことに「私自身は以前のもままで少しも変わっていないのになあ」と嘆いたのである。

第3段第4段ともに、男の一途な純愛と、外からの力に弄ばれる当代の女君を描いた作品となっている。そこにみるのは柔順な、家に縛られた女君の姿である。

7. 伊勢の齋宮 第69段

禁じられた愛の物語、題名由来の一段としても名高いのが第69段である。

伊勢神宮の齋宮は天皇の即位後、未婚の内親王・王女の中から卜定によって選ばれ、天皇の在位の間、天照大神の御杖代として奉仕する巫女のような存在であった。当然のことに世俗の雑事とは無縁であり、常に精進潔斎していなければならなかった。それも都を遠く離れた伊勢の地においてである。

物語は、昔男が勅使（狩の使）として伊勢の国に行くことになったことから始まる。伊勢の齋宮とはその母親の甥に当たる血縁者であったので、その母親は娘に「常の使よりは、この人、よくいたはれ」と言ってやったのである。齋宮も当然のことに、この男を丁重にもてなした。2日目の夜、男が「われて逢はむ」と言ってきたが、立場上、即座には決断しかねていた。だが、内心では母親のことばかりも何とか会いたいものだと思い、人の寝静まった深夜、童女を先に立てて男の許に出向いた。男は嬉しさのあまり、その寝所に連れて入り、子の一刻から丑三つまでの間、3時間余りも2人で語り合い、一緒に過ごしたのである。齋宮は話はずきなもの、夜明け前、人目を憚って早々に帰ってしまった。後朝に齋宮から歌がきた。「君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか」、昨夜のことは、はっきりとは覚えていません、という歌であった。そこで男は悲しくなって、「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ」と返歌した。その夜は国守の接待があり、盛大な酒宴が催されたため、残念ながら齋宮との逢瀬はままならなかった。翌朝、任を終えたので、次の任務地、尾張の国へ出発することになった。出発前、齋宮の方から、盃に歌を書いたものを渡された。そこには「かち人の渡れどぬれぬえにしあれば」と書いてあった。2人の縁はほんの浅いものでしたね、とあったので、男は、その下の句を「また逢坂の関は越えなむ」と、自分の思いを消し炭で書き加えて残した。そうして一人淋しく尾張の国へと旅立っていったという話である。

センセーショナルなのは、この齋宮の行為にあった。天皇の名代として神に仕える身であるのに、男の心を動かし、寝所で時を過ごしたということである。あってはならない行為を

したということである。しかし、考えてみれば、全く男というものを知らない年頃の女性があえて言えば犯した行為なのである。更に言えば、住み馴れた都から6日間もかかってやってきた辺境の地、伊勢にいたのである。都人が恋しく、女の男に対する作法も心得ない女性としては当然のことであり、ましてや相手は血縁の者であり、母親からも大切にもてなしなさいと伝言されていたのであるから精一杯の行為であったとも言えるのではないだろうか。だが、一方ではやはり立場上、このことは大事件なのである。このことが一層、当時の人々に関心をもたせ、人々を喜ばせたのではないだろうか。後日談⁶がまことしやかに作られるほど、この物語が有名になったのである。一言で言えば、この話は一人の高貴な、無垢な女性の愛の物語である。

注

- 1 致富長者譚・求婚難題譚・相聞譚・昇天譚・地名縁起譚等
- 2 『三代実録』文慶4年5月の業平の卒伝
- 3 竹岡正夫(1987)『伊勢物語全評釈』右文書院P860
- 4 『全評釈』P506 507
- 5 堀内秀晃・秋山虔校注(1997)『竹取物語 伊勢物語』日本古典文学大系17 岩波書店P82
- 6 『全評釈』P1023

参 考

- 1 中野イツ(1981, 1996)『齋宮物語』明和町・明和町教育委員会
- 2 稲本紀昭ほか(2000)『三重県の歴史』山川出版社
- 3 ◦鉄心齋文庫 伊勢物語文華館
神奈川県小田原市新屋3-2
- 4 ◦齋宮歴史博物館
三重県多気郡明和町竹川503
◦いつきのみや歴史体験館
三重県多気郡明和町齋宮3046-25